











〈蒙古字韻〉唵母のパスパ母音字と訓民正音の中声*

鄭 光



キーワード：『蒙古字韻』、パスパ文字、訓民正音の中声字、ハングルの‘o [o]’
表示、訓民正音の創制、ハングルとパスパ文字、パスパ文字の母音字

要旨

元の世祖フビライ・ハンの時代に制定されたパスパ文字は、170年あまり後に朝鮮で制定された訓民正音に多大な影響を及ぼした。パスパ文字では中国音韻学における伝統的な36字母の1つ1つに対応する33の記号を作り、子音を表記するための文字とした。この36字母の表は1308年に刊行された『蒙古字韻』に収録されており、我々はそれによってパスパ文字とその音価を知ることができる。この韻書は元代における漢字の中国語標準音をパスパ文字によって表したもので、元代の刊本を清代の乾隆年間(1736-1776年)に筆写した現存唯一の写本が大英図書館に所蔵されている。

パスパ文字の母音字については、これまで学界において正確に把握されてこなかったが、本稿では『蒙古字韻』の36字母の末尾に付された“ 此七字歸唵母”という記録から、ここに見られる“ ”の6字に、唵母 (U) ’を加えた7字が母音字として作られたものではないかと推定した。この韻書の15韻によると、これらは [i],  [u],  [iä, ü],  [o],  [eü, ø],  [ε] ’及び唵母の (U) [a] ’を表し、中世モンゴル語の前舌母音 /i, ü, ø, ε/ と後舌母音 /u, o, a/ を文字化したものと考えられる。中世モンゴル語では、/i, ø, ε/ と /u, o, a/ が母音調和において対立し、[i] は常に中立的である。

朝鮮の訓民正音における11の中声字では、4つの再出字を除くと、単母音を表記する7つの文字が制定されている。これはパスパ文字の唵母字、つまり母音字をそのまま取り入れる形で、基本字3つ、初出字4つ、計7つの単母音を文字化したものと考えられる。また、中世モンゴル語と同様に、訓民正音でも /o [o], /u [u], /a [a] / と /ø [ø], /i [i], /ä [ä] / は母音調和において互いに対立しており、/i [i] / は中立的である。中世モンゴル語と朝鮮時代の韓国語がこのような母音体系上の共通点を持つことは、やはり文字の影響と考えられ、その意味において訓民正音の中声字はパスパ文字の影響を受けて制定されたものと考えられる。

この他にも、訓民正音の欲母 [o] はパスパ文字の唵母,  (U) のように独自の音価を持たず、その母音が成節性 [+syllabic] を持つことを表示するものであるため、これもまたパスパ文字の影響によって制定されたものと考えられる。

1. 緒論

ハングル、即ち訓民正音について、我々は世宗が‘史上類例のない独創的な文字’を創制したと解釈している。これは、世宗が中国音韻学についての深い知識を持ち、集賢殿の学者たちもこの方面に造詣が深い者が少なくなかったと考えられていたために、疑問の余地がないものとされてきた。世宗は崔萬理等による訓民正音反対上疏に対する批答において、“[前略] 且汝知韻書乎？四聲七音、字母有幾乎？若非予正其韻書、則伊誰正之乎？—またお前たちは韻書を知っているのか？四声・七音と字母は幾つあるのだ？もしも私とその韻書を正さなければ、誰がこれを正せるのだ？”(『世宗實錄』巻 103、世宗 26 年 2 月庚子条)として、自らの音韻学的知識の高さを誇っている¹。

崔萬理は集賢殿を統括する最も高い職位である副提学に就いていた当時最高の学者であり、彼もまた音韻学についてはある程度の知識を持っていたと思われるが、彼らを前にして世宗が自身の音韻学的知識を誇示したのは、その学識が他者の追従を許さない水準にまで達していたことを物語っている。これは単に韻書だけを勉強したというものではなく、仏典によって習得した古代インドのパリーニ音声学、即ち仏家の‘声明記論’、‘毘伽羅論’を通じて音韻に対する深い知識を持ち、母音と子音、声調などについて該博な知識を有していたものと推測される。彼の周辺には、信眉、金守温兄弟のような学僧や仏教の専門家がいたためである。

世宗の側近にいて新文字の制定を手助けした集賢殿の少壮学者たちの中にも、音韻学と仏教の声明学に造詣の深い人物が多かった。集賢殿の学者たちによる新文字の解説書と考えられる(解例本)『訓民正音』には、単なる音韻学的知識を超えた、音韻に対する深い学識を見ることができ。例えば、五行にあてた‘牙、舌、唇、齒、喉’音という初声、つまり子音の順序について、『訓民正音』の「制字解」では発音部位が奥にあるところから‘喉音—牙音—舌音—齒音—唇音’の順で説明を加えている。このような調音の位置的特徴に対する認識は、音声学に関する深い知識がなければ不可能なことである²。

古代インド文法学派の音声研究に依拠して制定されたチベット文字では、母音字を子音の付属物と認定し、独立させることがなかった(鄭光 2009 : 195-6)。そこで、パспа文字においても母音字を喩母に帰属させたが、(解例本)『訓民正音』の「制字解」ではこれを完全に独立させ、“中聲承初之生、接終之成、人之事也。盖字韻之要、在於中聲、初終合而成音。—中聲は初

* この論文は、‘*The hP'ags-pa Script: Genealogy, Evolution and Influence*, The 16th World Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (ICAES 2009), Kunming China, July 27-31, 2009’において、“The Vowels of hPags-pa Script and the Middle Sound Letters of Hunmin-Jeongeum —論八思巴文字的母音字与訓民正音的中声”という題目で、2009年7月29日、中国・昆明において発表した原稿に加筆・修正を加え、『國語學』(韓國國語學會)第56號(2009年12月)に掲載されたものを更に補充し、それを竹越孝氏が日本語に訳したものである。

¹ これについては洪起文(1946)を参照。ただし、ここで言う四声とは‘平・上・去・入’の四声ではなく、‘全清・次清・不清不濁・全濁’という四つの声母を指す。しかし、これが混乱していると思われる場合もある。

² 野間秀樹(2010 : 16)はハングル、即ち訓民正音は音から創られたものと見て、母音や子音を表す字母を一つの音節単位に組み合わせるという仕組みの文字であると規定した。

声が発した音を受け継ぎ、終声が成り立つためにつなぐ、これは人の行う事柄である³。そもそも字韻の要は中声にあり、初声と終声が結合して音節を形成するのである。”として、中声つまり母音の重要性を強調している。

それのみならず、20世紀後半の生成音韻論 (Generative phonology) においてようやく音韻分析の最小単位として認定された弁別的素性 (distinctive features) を、訓民正音の当時すでに認定して抽出し、この素性によって制定字を説明している。初声字における五音、全清、次清、全濁、不清不濁といった素性や、中声字における舌縮、舌小縮、舌不縮や声深、声浅、不深不浅、あるいは闕開、口壁といった素性は、今日の先端的な弁別的素性の議論にあっても構築が難しい、高度の弁別性を念頭に置いて認定されるものである。これは、音素が‘弁別的素性の束または集合’であるとする20世紀後半の定義に合うように文字を音素単位で制定し、またそれに該当する弁別的素性を紹介したものと理解しても遜色がないほどである⁴。

世宗の訓民正音制定を「創制」と認める多くの記録にあっては、この文字が前例のないものであることを特に強調している。例えば、『世宗實録』(巻102) 世宗25年12月条の、“是月、上親製諺文二十八字。[後略]”という記事における‘親製(自ら作った)’という言葉や、[解例本] 巻末に付載された鄭麟趾の後序の、“[前略] 我殿下天縱之聖、制度施爲、超越百王。正音之作、無所祖述、而成於自然。豈以其至理之無所不在、而非人爲之私也。一わが殿下は天の授けた聖人であり、制度施策において百王を超越している。正音を作ったのは、先人の述べたものではなく、自然に出来たものである。どうしてその偉大なる理知は存在しない所がなく、人が私的に作ったものではないと言えようか。”という記載における‘無所祖述’、崔萬理の反対上疏文冒頭の、“臣等伏觀諺文制作、至爲神妙、創物運智、出千古。一臣らが謹んで諺文の制作を見るに、極めて神妙なものであり、事物を創造する知恵の働きは、はるか千古の昔より出るものようだ。”における‘創物運智’などの表現は、すべて訓民正音制定が優れて創造的な事業であったことを述べている。

しかし、こうした表音文字の制定は、訓民正音が初めてであったというわけではない。漢字を使用する中国の北方に居住していた民族は、文字の必要性を悟り、諸民族の言語を表記するための表音的な文字を作り、使用していた。例えば、チベットの吐蕃王朝ではソンツェン・ガンポ (Srong-btsan sgam-po) 大王がトンミ・アヌイブ (Thon-mi Anu'ibu) をインドに派遣して音声学を習得させた後、チベット文字を制定し、自国語と周辺民族の言語の記述に成功した (鄭光 2009)。

その後、契丹族の遼王朝や女真族の金王朝における太祖たちも新しい文字を制定し、これを

³ これは天・地・人の三才における人について言ったものである。

⁴ こうした音素に対する認識は、A. Martinet の “un phonème peut être considéré comme un ensemble de traits pertinents qui se réalisent simultanément” という定義や、R. Jakobson の “Phoneme is a bundle of distinctive features.”, L. Bloomfield の “The phonemes of a language are not sounds but merely features of sound which the speakers have been trained to produce and recognize in the current of actual speech sound.” という定義、またいわゆる内的接近 (the inner approach to phoneme) の定義などに表れている (李基文・金鎮宇・李相億 2000)。

自身の追従勢力に教育し、試験をし、官吏に任命することによって、新旧勢力の交代を果たした。さらにはモンゴル帝国のチンギス・ハンにせよ、元王朝のフビライ・ハンにせよ、ユーラシア大陸の北方に居住し、膠着的な文法構造を持つ言語の話し手たちは、漢字以外の多くの文字を創造し、使用していたのである。特に、当時朝鮮半島と密接な関係のあったモンゴルの元王朝で制定されたパスパ文字は、訓民正音に大きな影響を及ぼした。

我々の先祖の中にも、ハングルがモンゴルの文字と関係があるという主張をなす学者がいたが⁵、西洋ではアメリカ・コロンビア大学のゲーリー・レッドヤード (Geri Ledyard) 教授により、訓民正音がパスパ文字の影響を受けたという研究論文が学界に紹介されている⁶。1966年、カリフォルニア大学バークレー校 (University of California, Berkley) に学位論文として提出されたこの論文は、大部分の西洋の学者たちに支持されており、西洋ではハングルがパスパ文字の影響で作られたと信じられている。

東洋では、中国社会科学院民族研究所のジョナスト (照那斯图) 教授が宣徳五教授とともに照那斯图・宣徳五 (2001a, b) を発表し、やはり訓民正音がパスパ文字の影響を受けたと考えている。特に照那斯图 (2008) では、訓民正音の初声における5つの基本字がすべてパスパ文字の変形ないし模倣であるとの主張を行っている。彼は訓民正音の基本字5つとそれに対応するパスパ文字5つを次のように比較している。

ㄱ-ㄱ	[k]	ᠠ-ᠠ	[s]
ㄴ-ㄴ	[n]	ᠣ-ᠣ	[ø]
ㄹ-ᄀ	[m]		

こうした比較の結果、‘ㄱ’はパスパ文字‘ᠠ’における右上の角張った部分を模したものであり、‘ㄴ’は‘ᠣ’における左下の丸い部分を直角で表現したものとしている。‘ㄹ’は‘ᄀ’における左下の円を四角で表したものであり、‘ᠠ’は‘ᠠ’における左下の部分を真っすぐにした形であるとしている。そして最後に、‘ᠣ’はパスパ文字‘ᠣ’における左の切れている部分を塞いだ形であると説明している⁷。これにより、東洋にあってもハングルがパスパ文字の模倣であるとする説が広く行われている。

しかしながら、上のジョナスト氏の主張は、字形を無理矢理比較して強引に対応させたものと言わざるを得ない。特に“ᠣ-ᠣ [ø]”の対応は全く正しいとは思えないもので、その理由

⁵ 例えば、朝鮮時代の李瀾 (1681-1763) は『星湖僿説』においてパスパ文字影響説を主張し、柳愔 (1773-1837) は『諺文志』において蒙古字から訓民正音の文字が作られたと主張している。

⁶ この論文は、1965年末に学位論文として提出された“The Korean Language Reform of 1446”であるが、1998年3月に韓国の国立国語研究院研究叢書第2号として新丘文化社(ソウル)から刊行されている。参考文献のLedyard (1966)を参照のこと。

⁷ 原文は次の通り。“ㄱ道是八思巴字母ᠠ的右上角，即其横和竖的90度转折笔划。道是八思巴字母ᠠ的左下圆笔直下的左下角转折形式。[中略] ᄀ道是八思巴字母ᄀ的左下角圆形笔直的方化形式。[中略] ᠣ道是八思巴字母ᠣ的左下角的直立形式，或是左半部左右两箇斜笔。[中略] ᠣ道是八思巴字母ᠣ的左下部的封口形式”(照那斯图 2008: 40)。

は次の通りである。訓民正音の‘欲母○[ø, +syllabic]’と‘業母○[ŋ]’は上の点一つの違ひしかない類似した字形であり、これは訓民正音の制定者が欲母の‘○’と業母の‘○’の類似を認めたためである⁸。後代にこの区別がなくなったのも、最初からこの二つの音韻が似ていると認識されていたからであろう。しかも、世宗28年(1446)に刊行された{解例本}の「制字解」では、この5つの基本字が発音器官をかたどって制字したものであることを明らかにしているのである⁹。

これまで、Ledyard (1966, 1997, 2008) や照那斯図・宣徳五 (2001a, b)、照那斯図 (2008) に対して韓国の研究者が明確な形で反論を提示したことはない¹⁰。それは、パスパ文字と訓民正音との関係に対する国内の知識が不十分だったためである。筆者は、15年ほど前に大英図書館から『蒙古字韻』全篇の影印を入手し、パスパ文字を研究するとともに、長きにわたってそれを訓民正音と比較してきた。その成果を鄭光 (2008a, b) において発表するとともに、2008年11月17日、韓国学中央研究院において開催された‘訓民正音とパスパ文字国際学術ワークショップ’ (International Workshop on Hunminjeongeum and hPags-pa script) において、前述の2人の研究者、アメリカのグリー・レッドヤード教授と中国のジョナスト教授とともに、訓民正音とパスパ文字の制定における影響関係を討論した。これは、訓民正音のパスパ字模倣説に対する最初の本格的な学術的対応と言える。本稿では、主にパスパ文字の母音字制定と訓民正音の中声字との関係を調べてみたい。

2. パスパ文字の発明

⁸ ハングルの‘○[異擬]’は現在二つの音価を持っている。音節初、つまり onset の位置における音価は [ø, null] であって、音節を形成する母音であることを示す。音節末、つまり coda の位置では [ŋ] の音価を持っている。例えばハングル‘ㅇ’は母音の [a] で、‘ㄱ’における音節末‘ㅇ’は [kaŋ] の [ŋ] である。訓民正音が創製された時この二つは区別されており、音節末の [ŋ] は丸の上に点がある、即ち‘○’と‘○’の違ひがあった。これらは生成音韻論な弁別的素性という観点から見ると [+sonorant] という共通性があるが、ただ‘○[ŋ]’には [+nasal] の弁別的素性が添加されていると考えることができる。

⁹ 世宗が生存している時に刊行された{解例本}『訓民正音』(1446年刊)の「制字解」では、初声の基本5字について、次のような製字原理を記している。

- 牙音 ㄱ [k, g] - 象舌根閉喉之形 (-舌根が喉を塞ぐ形を象ったもの。)
- 舌音 ㄴ [n] - 象舌附舌腭之形 (-舌が上顎に触れる形を象ったもの。)
- 唇音 ㅁ [m] - 象口形 (-口の形を象ったもの。)
- 齒音 ㄷ [s] - 象齒形 (-齒の形を象ったもの。)
- 喉音 ㅇ [ø, ŋ] - 象喉形 (-喉の丸い形を象ったもの。)

¹⁰ 2008年に韓国学中央研究院で開催されたワークショップにおいて、Ledyard (2008) と照那斯図 (2008) はハングルがパスパ文字を模倣したとする説を重ねて主張したのに対し、同じ会場でその次に発表した鄭光 (2008c) では、パスパ字はチベット文字を変形して作ったものであり、ハングルの字形との類似点は非常に少ないという事実を提示して反論した。そして、ハングルの字形は、初声字の場合、まず発音器官をかたどった5つの基本字を作り、それに画を加えて変形させた異体字を加えて17字を制字したこと、中声字の場合は、まず天地人の三才をかたどって3つの基本字を作り、さらにその組み合わせで8字を制字したことを明らかにするとともに、これは世宗の生存時に刊行された{解例本}『訓民正音』の「制字解」において制字原理として説かれており、ハングルの字形が特徴的、独創的に作られたものであることを主張した。これはおそらく、これまでパスパ字模倣説を主張してきた本人たちの前でなされた最初の本格的な反論であろう。

元の世祖フビライ・ハンがチベットのラマ僧パスパ（八思巴）に命じて作らせた蒙古新字、パスパ文字は、至元6年（1269）に世祖の詔令により頒布された。その制定目的の一つが中国語学習であり、漢字の標準音を学ばせるために発音記号を作ることであった（鄭光 2009）¹¹。Poppe（1957：2-3）では、パスパ文字制定の理由について、Pozdněev（1895-1908）が主張する2種と、Vladimirtsov（1932）が主張する1種の、計3種を挙げている¹²。そのうちの2番目の理由が、中国の漢字を転写するためにパスパ文字を制定したというものである。

このことは、フビライ・ハンがパスパ文字頒布の詔令の中で、“故特命國師八思巴創爲蒙古新字譯寫一切文字、期于順言達事而已。—そこで特に國師パスパに蒙古新字を創造せよという命令を下し、すべての文字を〔パスパ文字で〕転写して書かせようとした。これによって言語が通じ、事物が正しく伝達されることを望むのみである。”という一節に符合するもので、漢字を含むすべての文字の発音を転写するためにパスパ文字を制定したことが示されている¹³。

詳しくは次節で述べるが、特にパスパ文字41字を『広韻』の36字母に当てはめる形で制定したことは、この文字が漢字の学習のため、その発音の表記を目的として作られたことを示している。漢字の正確な表音のためには、ウイグル式モンゴル文字は非常に不適切なものであった。なぜなら、それが表音文字であるにしても、句節単位で表記するための文字であるため、漢字の個々の音節を表記するには合わないからである¹⁴。

このようにしてパスパ文字が制定されるとすぐに、当時漢字の標準韻書であった『広韻』系統の『礼部韻略』やその傍系韻書である『新刊韻略』などに基づき、それをパスパ文字で音写した『蒙古韻略』や『蒙古字韻』といった蒙古韻書が編纂された¹⁵。パスパ文字についてはまだ明らかになっていない部分が多いが、それでもパスパ文字の全貌は、現存する唯一の蒙古韻書である『蒙古字韻』のロンドン鈔本によって調べることができる。ここでは、パスパ文字の母音について、『蒙古字韻』のロンドン鈔本を通して考察することにしたい¹⁶。

¹¹ ‘パスパ’文字という術語は、この文字を作ったチベットのラマ僧の名前（hPags-pa, チベット語で‘聖童’の意）から来たもので、その名は漢字で‘八思巴、八思馬、帕克斯巴’などと表記されてきた（『元史』巻202, ‘傳’第89‘釋老八思巴’条）。しかし後代になると‘八思巴’という術語が一般的になり、その現代中国語音である‘パスパ’が通行している。そもそも‘八思巴’は、入声を保存する南京官話音に依拠した表記で、やはり‘hPags-pa’を写したものである。我々が初期に‘パクバ’と表記したのは、本稿で引用した服部四郎氏の‘パクバ字’といった日本の研究者の術語に依ったものである。西洋では、区別符号（diacritical mark）を欠く‘Phags-pa’が通行している。

¹² ポッペ氏はこれについて、Pozdněev, Лекции по истории монгольской литературы, читанныя... в 1895, p. 96 академическомъ году, St. Petersburg, 1906, p. 172 及び Vladimirtsov, Монгольские литературные языки, p. 8. Id., Монгольский международный алфавит XIII века からの引用であるとしている。Pozdněev（1895-1908）は全3巻（vol. I-III）であり、第3巻の出版は1908年に行われた（Poppe 1965：82）。

¹³ ここに引用したのは『元史』巻202‘釋老伝’である。『元史』は漢文で記されているが、この文体は非常に独特なため、これに対する特別な知識なしには読みこなすことが難しい。

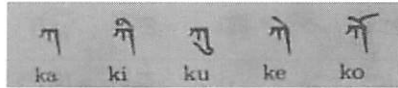
¹⁴ この部分については、ポッペの“[前略] Pozdněev (Pozdněev) expressed the opinion that the preparation of these translations would inevitably have come up against great difficulties by virtue of the unsuitability of the Uigur script to transcribe Chinese characters.”という言及を参照。

¹⁵ 『蒙古韻略』は『礼部韻略』をパスパ文字で転写したものであり、『蒙古字韻』は『蒙古韻略』系統の『新刊韻略』を基にして、パスパ文字で当時の漢字音を転写したものである。鄭光（2009：182-188）参照。

¹⁶ パスパ文字の母音字と訓民正音の中声字については、鄭光（2009）において論じるところがあった。し

3. パスパ文字 36 字母の喩母字

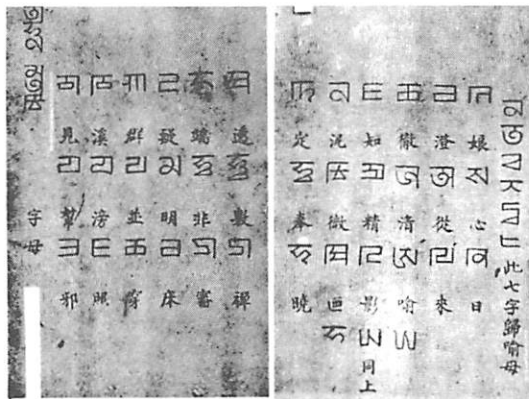
パスパ文字の母体となったチベット文字では、母音字は独立して作られず、母音が異なる場合に、子音字の上か下に區別符号 (diacritical mark) として付けられるだけである。牙音 (velar sound) にあたる軟口蓋音に付された子音字を見てみると次のようである。



〔写真1〕チベット文字の母音符号 (子音字の上か下に付されたもの)

〔写真1〕によると、チベット文字では [ka] に対する [ki, ku, ke, ko] の母音字は、子音字 [k] の上か下につく區別符号として表示されている。

しかし、パスパ文字では母音字を独立させている。前述のように、『蒙古字韻』の「字母」には中国の伝統的な 36 字母表とそれに対応するパスパ文字が、次のように示されている。



〔写真2〕『蒙古字韻』の「字母」

注目されるのは、喩 [𑖞, 𑖟], 影 [𑖠, 𑖡], 匣 [𑖢, 𑖣] の3母は対応するパスパ文字が上下で2つずつあることである¹⁷。これは、これらの字母におけるパスパ文字に異体字があ

かし、その段階では『蒙古字韻』36字母図に添記された“𑖢 𑖣 𑖤 𑖥 𑖦 𑖧 此七字歸喩母”における6つのパスパ文字の音価をはっきりと把握することができなかった。これまでその方面に関する研究が全くなかったためである。本稿は、鄭光 (2009c) の誤りを正し、パスパ文字の母音字と訓民正音の中声字との関係をより明らかにするために執筆したものである。

¹⁷ 喩母の異体字 [𑖞] と影母の異体字 [𑖡] は字形が少し異なり、〔写真2〕に見られるように、右下の部分が喩母の場合ローマ字の u に類似している。『国語学』の匿名の査読者は、喩母 [𑖞] の異体字 [𑖡] を影母 [𑖠] の異体字 [𑖡] と混同したものと思われるが、〔写真2〕『蒙古字韻』の「字母」を見ると、この2つは並んでいて区別することができる。査読者が非常に詳細に本稿を検討し、誤字や年度の誤りを指摘してくれたことには感謝の意を表する。しかしながら、指摘された多くの部分で筆者の考えと異なる見解が見られるのも事実であり、その重要なものについては脚注で紹介することにしたい。

ったことを意味する。上を表で示すと以下のようなになる。

【表1】『蒙古字韻』「字母」の36字母¹⁸

	牙音	舌音		唇音		齒音		喉音	半音	
		舌頭音	舌上音	唇重音	唇輕音	齒頭音	正齒音	喉音	半舌音	半齒音
全清	見 ㄐ	端 ㄊ	知 ㄊ	幫 ㄅ	非 ㄆ	精 ㄑ	照 ㄒ	曉 ㄒ		
次清	溪 ㄑ	透 ㄊ	徹 ㄊ	滂 ㄆ	敷 ㄆ	清 ㄑ	穿 ㄑ	匣 ㄑ (ㄑ)		
全濁	群 ㄑ	定 ㄊ	澄 ㄊ	並 ㄆ	奉 ㄆ	從 ㄑ	床 ㄑ	影 ㄑ (ㄑ)		
不清不濁	疑 ㄑ	泥 ㄊ	娘 ㄊ	明 ㄆ	微 ㄆ			喻 ㄑ (ㄑ)	來 ㄑ	日 ㄑ
全清						心 ㄑ	審 ㄑ			
全濁						邪 ㄑ	禪 ㄑ			

【写真2】の右側に見られる“ 此七字歸喻母”の6字と喻母‘ㄑ (ㄑ)’を合わせた7つが、母音を表記するために作られたパスパ文字と思われる¹⁹。これは、【写真2】に見られるように、実際に記されたパスパ文字は6つだが、字母に挙げられた喻母‘ㄑ, ㄑ’を含めると7つになるという意味である。これが6字であるか7字であるかについては、これまで中国や欧米の研究者の間で多くの議論があった。

筆者は、これが‘ㄑ (ㄑ)’を含めて7字の母音文字を意味しているものとする。例えば、朝鮮・崔世珍による『訓蒙字會』の巻頭に付された「諺文字母」においては、既に出現した例は用いないという事例が見られる。

初中聲合用作字例、가가거거고교구구구기

以ㄱ其爲初聲、以ㅏ阿爲中聲、合ㅏㅏ爲字則가、此家字音也。又以ㄱ役爲終聲、合가ㅏ爲字則가、此各字音也。餘倣此²⁰。

初中終聲合用作字例、간肝、갈*筥、갈*刀、갈*柿、갈甲、갓*皮、강江²¹

上の例によると、最後の‘初中終聲合用作字例’は当然、‘가 (各)、간 (肝)、갈 (*筥)、갈 (*刀)、갈 (*柿)、갈 (甲)、갓 (*皮)、강 (江)’の8例でなければならないが、最初は‘가 (各)’ではなく‘간 (肝)’から始まっている。これは最初の‘가 (各)’が前に一度出現しているからであろう。同様に、『蒙古字韻』においてこの6つのパスパ文字を挙げ“此七字歸喻母”としたのは、喻母‘ㄑ (ㄑ)’が前にあるためである。これは古人に特有の叙述方式であったと

¹⁸ () 内のパスパ文字は【写真2】において下に示されたパスパ文字の異体字。

¹⁹ このような主張は、鄭光 (2008a, b) において初めて提起されたものである。

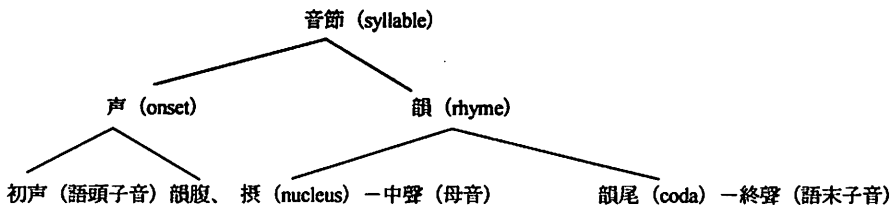
²⁰ 小字の‘其、阿、役’などはハングルの漢字名称を指す。即ち、‘ㄱ其役’では、ㄱの初声は‘其 [ki]’であり、終声は‘役 [yak]’であることを表す。

²¹ *を付した漢字は訓詁、つまり意味を表すものである。原文ではそのまま示されている。

見なければならない²²。

羅以智の「跋蒙古字韻」ではこれについて、“[前略] 此書先列三十六字、後列歸入喩母字七字、凡四十三母、又相同字三字。按盛氏法書考中載國字四十二母。[後略] —この書はまず 36 字母を列挙し、その後に喩母に帰する 7 字を列挙しており、全部で 43 母となる”と記しており、36 字母に喩母に帰する 7 字母を合わせ、全部で 43 母としている²³。しかし、『蒙古字韻』を見ると、喩母のパスバ文字は 6 字であって 42 字にしかならない。

中国音韻学において、語頭子音 (onset) は声または声母として区別されるが、母音は認定されず、韻 (rhyme) の中に包含される存在である。金完鎮他 (1990 : 154) では、このような中国音韻学に立脚して、言語音を音節構造として認識する複線音韻論 (non-linear phonology) の方法を紹介するとともに、訓民正音の音節構造を次のように描いている。



これを見ると、中国の音韻学においてはまだ中声つまり母音は独立的な要素として認定されていなかったことがわかる。鄭光 (2009b) で明らかにしたところによれば、チベット文字以降北方民族の間で流行した新文字は、主に漢字を変形させて作った表音的な文字であるが²⁴、基本的には声と韻に分けた文字を結合させるという方法を持つ。したがって、パスバ文字の制定において喩母を独立させ、別の文字を作ったことは大きな進展だったと言うことができる。なおかつ、訓民正音において中声を独立的な単位と認め、初声と終声に対比させたことは、これよりもさらに一步進んでおり、文字の制定という面を超えてすばらしい音韻論的知識を持っていたことがわかる。

次に、パスバ文字の母音表記について具体的に調べてみることにしよう。

4. パスバ文字の 7 つの母音

『蒙古字韻』では韻を 15 に分けている。‘總目’には‘一東’から‘十五麻’に到る 15 の韻目を示す漢字と、その発音が記されている。これを写真で示すと以下の通りである。

²² 上の記述は‘初聲終聲通用八字’という題目の下で初声と終声に通用する 8 字の例を挙げたもので、‘ㄗ (各)’を例として‘ㄱ’の終声を示した後で 7 字 (肝、*笠、*刀、*柿、甲、*皮、江) を挙げ、それ以外の終声を示したものである。これは、すでに‘ㄱ’の例を示しているために、あえて再度挙げなかったものであり、『蒙古字韻』の字母と共通する例と見るべきである。

²³ 『養恬齋文鈔』巻 3 による。羅以智の「跋蒙古字韻」については鄭光 (2009 : 28-32) の中で詳しく紹介し、全文を転載するとともに韓国語訳を付している。

²⁴ 例えば、遼の契丹文字と金の女真文字にはいずれも大字と小字があるが、小字の方は表音文字であり、大字の方は漢字の声と韻を区別し、それを表音的に表現したものである (鄭光 2009b)。



【写真3】『蒙古字韻』15韻總目

【写真3】の‘15韻總目’をローマ字に転写して示すと次のようになる。

【表2】『蒙古字韻』の15韻

八思巴文字	ʔi ²⁵	zi	sam	sahi	u	lèu	tshi	pa	giw	ši	šiʔi	šizi	šisam	šisahi	šiu
漢字音發音	duŋ	gəiŋ	ʔaŋ	tʂi	ʔəu	gea	tʂin	ʧan	sən	səw	ŋiw	tam	tshim	go	ma
漢字 數字	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五
韻目字	東	庚	陽	支	魚	佳	真	寒	先	簫	尤	覃	侵	歌	麻

この表によると、『蒙古字韻』では15韻を表示するために‘ㄊ [u] , ㄊ [è, あるいは ε] , ㄊ [a] , ㄊ [i] , ㄊ [ew, ö] , ㄊ [iw, ü] , ㄊ [o]’の7母音が使われている²⁵。したがって、上の15韻に現れる母音は、前舌母音 /i, ü, ö, è (ε)/ と後舌母音 /u, o, a/ に分けることができ、母音調和に関与しない /i/ を除けば、/ü, ö, ε/ と /u, o, a/ が互いに同化をなそうとする典型的な口蓋的母音調和 (palatal harmony) の母音を文字化したものと考えることができる。中世モンゴル語において /i/ が中世韓国語ほど母音調和に関与的でないのは、広く知られた事実である (Poppe, 1960, 1964: 184)。

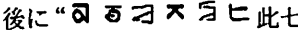







パスパ文字がこのようなモンゴル語の7母音を認定した上で、漢字音を表記するためにどのような文字を制定したのかについては、『蒙古字韻』から探ることができる。『蒙古字韻』15韻に依拠し、所収のパスパ文字をローマ字転写してみると次のようになる。

²⁵ 『蒙古字韻』の36字母表によると、この文字は影母^ㄊの異体字である。【写真2】と【表1】を参照のこと。

²⁶ [è, è] と [ε] に当たる文字について、服部四郎 (1984b) では、“【前略】この韻書において、蒙古語資料のバクバ字 e に当たる字は、それとほぼ形が同じであるけれども、同じく è に当たると、私が以下に述べる根拠によって考える字は、私は、昭和21年 (1946年) の拙著『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』、龍文書局、昭和21年9月)において、これを [ε] で翻字した。【後略】” (服部四郎 1984b : 225) と述べて、/è/ を /ε/ に改めている。








[表 3] 15 韻の韻目表²⁷

韻	韻目字	再構音	パスバ文字の韻 (終声を含む)
一東	東 dōng	*-uŋ	-ung, -eeung
二庚	庚 gēng	*-əŋ	-ing, -hing, -yung, -eeing, -wung, -ying
三陽	陽 yáng	*-aŋ	-ang, -yang, -wang, -hang, -ong, -weang
四支	支 zhī	*-i, *-i	-i, -hi, -eei, -ue, -eeue, -yue, -wi
五魚	魚 yú	*-u	-u, -eeu
六佳	佳 jiā	*-ai	-ay, -way, -yay, -hiy, -iy
七真	真 zhēn	*-ən	-in, -un, -eeun, -hin, -yin, -win
八寒	寒 hán	*-an, *-ɔn	-an, -on, -wan, -yan
九先	先 xiān	*-ən	-en, -een, -ween, -eeon, -yen
十蕭	蕭 xiāo	*-au	-aw, -ew, -eew, -waw, -yaw, -weew
十一尤	尤 yóu	*-əu	-iw, -uw, -hiw, -yiw, -ow
十二覃	覃 tán	*-am, *-əm	-am, -em, -eem, -yam, -yem
十三侵	侵 qīn	*-im	-im, -him, -yim
十四歌	歌 gē	*-ɔ	-o, -wo
十五麻	麻 má	*-a, *-ə	-ee, -wa, -ya, -wee, -we, [-a, -e]

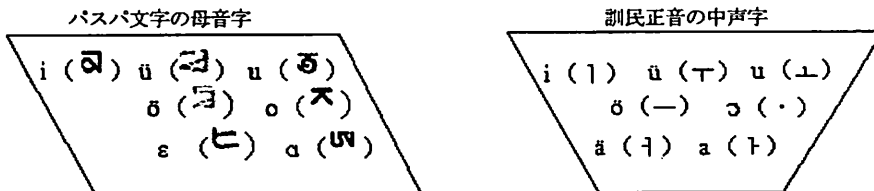
この表によれば、15 韻から /u, éu, a, i, o, ɔ, e, eu, ew, iw, ow, é, ε/ といった母音表記を抽出することができ、この表音から再構される母音としてやはり /u, o, a, i, ü (iu, iw), ö (eu, ew), é (ε)/ の 7 種を求めることができる。これが、『蒙古字韻』において巻頭に附載された‘字母’の最後に‘此七字歸喩母’として記された7つの母音字、即ち‘ [i],  [u],  [iu, ü],  [o],  [eu, ö],  [ε]’字と‘喩母’の‘ (ᠨ) [a]’を合わせた7つの母音を製字した基礎になったものと思われる²⁸。これは前舌母音 /i, ü, ö, ε/ と後舌母音 /u, o, a/ からなる構造を示している²⁹。

5. パスバ文字の8つの母音

²⁷ このローマ字転写は、王力(1985)の第7章における元代19韻の再構とインターネットサイト BabelStone の‘The Fifteen Rhyme Categories’などを参考として、筆者が行ったものである。参考にした後者の転写には問題が多いため修正を施した。特にA字を本稿では[u]とする点は重要な差異である。

²⁸ これは服部四郎(1984b)において主張される7母音と‘ [iu, ü]’だけ異なり、他は同じである。しかし、‘ [i] = i,  [u] = u,  [o] ≠ ε,  [eu, ü] = ü,  [ε] = e,  [a] = a’すると前舌低母音 /ε/ が後舌高母音 /u/ に対応することになり、『蒙古字韻』の‘字母’に見られる文字が均衡の取れた母音体系とならない。服部四郎(1984b)が[ü]を/ε/と見るのはこのような母音体系上の問題を勘案したものである。本稿ではこれを/u/に、[eu]を/ö/と見て体系の均衡化を図った。

²⁹ これに基づけば、パスバ文字の母音字と訓民正音の中声字は、概ね次のような母音体系を意識して制定されたと推定することが可能である。



一方、Poppe (1957) ではこれとは別に、パスパ文字の母音として全部で8つを挙げている。[写真4-2]に掲げるパスパ文字の図(母音)を見ると、ポップ氏はパスパ文字の母音として /a, o, u, e, è, ö, ü, i/ の8つを再構しており、また[写真4-1]にあるように子音の中にも /y, ü/ があるので、母音とそれに準ずる音として10個を認定していることになる³⁰。これは前舌の /e, è, ö, ü, i, y/ と後舌の /a, o, u, ü/ に分けることができる。

ᠠ	β	ᠢ	ᠷ
ᠨ	ᠪ	ᠣ	ᠶ
ᠨ	ᠮ	ᠡ	ᠵ
ᠨ	ᠵ	ᠢ	ᠰ
ᠨ	ᠳ	ᠨ	ᠬ
ᠨ	ᠳ	ᠨ	ᠬ
ᠨ	ᠨ	ᠨ	ᠮ
ᠨ	ᠨ	ᠨ	ᠮ
ᠨ	ᠨ	ᠨ	ᠮ
ᠨ	ᠨ	ᠨ	ᠮ
ᠨ	ᠨ	ᠨ	ᠮ
ᠨ	ᠨ	ᠨ	ᠮ
ᠨ	ᠨ	ᠨ	ᠮ
ᠨ	ᠨ	ᠨ	ᠮ
ᠨ	ᠨ	ᠨ	ᠮ

〔写真4-1〕ポップ氏による
パスパ文字図(子音)

ᠠ				ᠠ
ᠡ	ᠢ	ᠣ	ᠤ	ᠡ
ᠤ	ᠥ	ᠦ	ᠦ	ᠦ
ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ
ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ
ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ
ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ
ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ
ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ
ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ
ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ
ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ
ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ
ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ
ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ	ᠦ

〔写真4-2〕ポップ氏による
パスパ文字図(母音)

近年、日本の研究会においてパスパ文字の字母表を提起した吉池孝一(2005:9)では、母音字として /u, o, i, è, e/ だけを認定し、大部分の言語に母音として存在する /a, a/ や Poppe (1957: 24) において提案された /ü, ö/ の区分を認めていない。ポップ氏のパスパ文字はモンゴル語表記において示される前舌対後舌の円唇母音を区別して記したものであると思われるが、吉池氏はこの区分を認めず、別のものとして考えていないようである。

パスパ文字も訓民正音のように、表記の対象によって、即ちモンゴル語か中国語の漢字音かによって文字が変わり、同じ文字でもその音価が異なる場合がある。パスパ文字はモンゴル語音か中国語音かによって異なり、サンスクリット語やチベット語の発音を表記するために別の文字を使用することもある。

ポップ氏が提示するパスパ文字の母音字の中には、2つの文字を連ねたものがある。〔写真4-2〕に見られる [ü] と [ö] を表すパスパ文字は、いずれも‘母音表示 [ᠠ] + 前舌 i [ᠢ] + u [ᠤ]’、‘母音表示 [ᠠ] + 前舌 e [ᠡ] + o [ᠢ]’、または‘前舌 i [ᠢ] + u [ᠤ]’、‘前舌 e [ᠡ] + o [ᠢ]’ が連続した形である。しかし、『蒙古字韻』「字母図」の末尾に付された7つの母音字における ‘ᠠᠢ [iü, ü]’ と ‘ᠠᠡ [eü, ö]’ を見ると、前舌の [i] と [e] の

³⁰ 子音に収められた /y, u, i/ を、吉池孝一(2005:9)では半母音として処理している。

表示が先に来て、下に [u, 𐠪] を付した形である³¹。おそらく2種類の方法で [ü, ö] を表示したか、あるいはポップ氏の提示したものは単なる2母音の連続かも知れない。[u, 𐠪] は 𐠪 𐠪 のように音節末 (coda) の位置に現れる母音であり、上の [写真4-1] では子音末尾に収録されている。

中世モンゴル語において、前舌と後舌の対立である /o : ö/, /u : ü/ は互いに母音調和をなし、助詞や語尾において母音が自動的に交替する。ウイグル式モンゴル文字では 'o : u, ö : ü' の区別がないが、パスパ文字ではこれを区別して '𐠪 [iü, ü]' と '𐠪 [eü, ö]' で記し、𐠪 [u]、𐠪 [o] と区別したのである³²。これらはすべて漢字の中国標準音を記録する際にも使用されている。

Poppe (1965 : 184-185) において指摘されるように、蒙古文語とカルムイク (Kalmuck) 語は7つの単母音から成り立っており、母音調和は前舌母音対後舌母音という最も単純な形を取る。即ち、/a, o, u/ の後舌母音と /e, ö, ü/ の前舌母音が互いに同化しようとし、/l/ は常に中立的な存在である³³。『蒙古字韻』の '字母' に見られる7つの喩母字も、結局のところ /a, o, u, e, ö, ü, l/ という7つの母音を文字化したものと考えることができる。ただし、漢字音の表記に使用されたものなので、蒙古語を表記した場合のように母音調和の現象は見られず、上で述べたようにその音価についても多少の差異があるものと思われる。

訓民正音の制定においては、初声17字に対して中声を独立させ、別に11字を創造した。これに関しては多くの研究があるので、ここで再度述べる必要はないが、基本字が3つ (・, 一, |)、初出字が4つ (ㄊ, ㅏ, ㅑ, ㅓ)、そして再出字が4つ (ㅕ, ㅗ, ㅛ, ㅜ) の計11字で、このうち再出字が“起於 | [y]”とされ ' | ' 系の二重母音であることはよく知られている。

基本字三つの製字原理は、先ず '・' が丸い形で天を象徴し、次の '一' は平らな形で地を象徴し、最後の '| ' は人が立った形を表した字である。また、{解例本}『訓民正音』の「制字解」では次のように各字の弁別的素性と母音調和における陰陽の位置を説明している。

基本字			
・	一		…文字
天圓	地平	人立	…象形
聲深	不深不淺	聲淺	…弁別的素性
舌縮	舌小縮	舌不縮	…同上
陽	陰	中立	…母音調和の位置

³¹ ただし、パスパ文字の場合は前舌表示が前に来て、訓民正音の場合は '위 [ui, u], ㅟ [oi, ö]' のように前舌表示が後に来るという違いがある。

³² '𐠪 u k', ['eo] や '𐠪 u 𐠪', ['eu] における '𐠪' は、ここでは訓民正音の中声字に付された 'o (欲母)' のようなものであり、[a] の音価を持つものではない。なお、パスパ文字を連続して記す場合には字母を横にして並べ、単独で記す場合には縦に置く。

³³ Poppe (1955 : 84) によれば、アルタイ祖語の段階で母音 '*i' と '*ɨ' の融合が起こったために '*i' が中立的になったものという。

初出字

ㄷ	ㅌ	ㅌ	ㅌ
・同而口蹙	・同而口張	一同而口蹙	一同而口蹙
闔	關	闔	關
陽	陽	陰	陰

再出字

ㄷ	ㅌ	ㅌ	ㅌ
ㄷ同而起於	ㅌ同而起於	ㅌ同而起於	ㅌ同而起於
闔	關	闔	關

このように、11 の中声字を陽位にあるものと陰位にあるものに分け、‘|’は“獨無位數”として次のような陰陽の対立を表現している。

陽位	・, ㄷ, ㅌ (ㄷ, ㅌ)	獨無位	
陰位	一, ㅌ, ㅌ (ㅌ, ㅌ)		

これは、中世韓国語の母音がモンゴル語と同様に陽系列の ‘・[ɔ], ㄷ[o], ㅌ[a]’ と陰系列の ‘一[ɔ], ㅌ[u], ㅌ[e]’ に分かれ、母音調和に中立的な ‘| [i]’ があることを前提として、中声字つまり母音字を作ったと考えるほかはないであろう³⁴。

鄭光 (2008a) において主張したように、世宗が訓民正音を制定する際に、当時の韓国語の音韻を分析してその1つ1つに記号を当てはめていったものと見ることに、様々な無理がある³⁵。例えば、子音表記に使用された初声字 ‘ㅇ’ は、当時韓国語の音韻には存在していなかったことが知られているが、これはパスパ文字の影[?]母に対応させる形でこの文字を制定したという可能性は極めて高いものと思われる。また、当時濃音が平音や激音と区別される音韻であったにも拘わらず、これを表記するための記号を制定しなかったのは、パスパ文字においてこれを表記する記号がなかったためと考えられる。

訓民正音の中声についても同様で、パスパ文字の喩母に合わせて7つの記号を作り、これに再出字の4字を加えたものが、その11字ではないかと考えられる。これまでの議論において、中世韓国語の基本母音が7つというのは音韻の同型性 (pattern congruity) から見て大変不合理

³⁴ 訓民正音で創られた母音字の陽音 /・[ɔ], ㄷ[u], ㅌ[a]/ と陰音 /一[ɔ], ㅌ[u], ㅌ[e]/ の対立は、後舌母音対前舌母音の対立、つまり典型的な母音調和の口蓋的調和 (palatal harmony) である。この母音調和はハングルが創られた当時の朝鮮語の表記より乱れている。これはハングルが当時の朝鮮語の母音を音韻分析してその一つ一つの音韻に文字を与えたものではなく、パスパ文字の母音を表す喩母の七つの文字にそのまま対応させて中声字を創ったためであろう。

³⁵ この点については、鄭光 (2006, 2008) 等において幾度か論じている。

なものであるという主張が絶えなかった。もしも、パスパ文字の7つの母音字に合わせる形で訓民正音の7つの中声字が作られたとするならば、この種の議論は再考されるべきであり、新たな突破口が開けるであろう。もちろん、これについては今後さらなる研究がなされなければならない。

6. パスパ文字喩母^ㄹ (ㄹ)の音価

筆者は、元代のパスパ文字が漢字音を表記する際、『蒙古字韻』ではまず訓民正音における欲母 [o] に相当する喩母^ㄹ (ㄹ) [ø] を置き、さらに ㄱ [i], ㄴ [u], ㄷ [ju, u], ㄹ [o], ㅅ [éü, ø], ㅈ [e] を記すという形で7つの母音字を制定したものと考える。^ㄹ (ㄹ) [ø] については、前述したようにすべてのチベット系文字が音節末に母音 [a] を持っているので、パスパ文字においてもこれで [a] を表したものと思われる³⁶。しかし、喩母である^ㄹ (ㄹ) は [a] の音価を持つと同時に、異なる母音字とともに用いる時には [ø, null] としてその母音字を表す。つまり、この場合の^ㄹ (ㄹ) は訓民正音の‘ㅇ (欲母)’と同様、生成音韻論で言われる成節性の素性 ([+syllabic]) を示し、単独で用いられるときは [ø] を表すと考えることができる。

例えば、『蒙古字韻』のパスパ文字表記^{ᠮᠣᠩ} [mong] ^{ᠶᠣᠯ} [yol] ^{ᠲᠰᠢ} [tsahi] ^{ᠹᠠᠢᠨ} [‘uin] ”の最後^{ᠹᠠᠢᠨ} [‘uin] ’において、‘^ㄹ’は前述したように36文字における喩母として [a] の音価ではなく /ø, null/ を表し³⁷、訓民正音の初声字である欲母‘ㅇ’と同じものと考えることができる。この発音は訓民正音で‘윈 [win] ’となるもので、正確な転写と見なすことができる。

この喩母字について、服部四郎 (1984b : 217) では服部氏とポッペ、リゲティ両氏の主張を以下のように比較し、これを [ʼ] (魚母, gradual beginning of voice) としている。

	ㄹ, ㄹ (喩)	ᄀ, ㄹ (影)
服部	ʼ	ᄀ
Poppe	なし	·
Ligeti	”	·

これにつき、服部四郎 (1984a : 50) では、これにあたる中国語音を次のように推定している。

- ‘ (影母) [ʔ] (声門閉鎖音)
- ʼ (魚母) 柔らかく出る声 (gradual beginning of voice)

しかし、『元朝秘史』モンゴル語などの表記において、服部氏は母音間で [VʼVV] のよう

³⁶ 吉池孝一 (2005 : 10) では、パスパ文字に“母音 a を表す専用の文字はない”としているが、これはこの文字を誤って理解したものと思われる。

³⁷ 上と同様に、連続したパスパ文字は横書きで表す。

民正音即ちハングルは、パスパ文字が持つ未解決の問題に多くのヒントを提供すると思われる。そこで、本稿ではパスパ文字の母音字について、ハングルの中声字を根拠として次に挙げるいくつかの主張を行った。

第一は、パスパ文字が漢字の中国語標準音を表示するために制定されたことで、基本となる7つの単母音を表す文字は『蒙古韻略』や『蒙古字韻』の36字母に喩母字として収められたと思われる。上で言及した、『蒙古字韻』36字母表の右側下段に見られる“ᠪ ᠢ ᠨ ᠨ ᠨ ᠨ ᠨ ᠨ ᠨ 此七字歸喩母”の6字と、喩母‘ᠮ’を合わせた7字は、中国語標準音を転写するために必要な7つの母音字と考えられる。

第二は、この母音字が訓民正音に影響を与えたことで、『訓民正音』の11の中声字における3つの基本字と4つの初出字は、パスパ文字の7つの母音に依拠して制定されたと思われる。残りの再出字4字がi系の二重母音であることは〔解例本〕『訓民正音』に示されている⁴⁰。そして、これらの組み合わせによって作られる訓民正音の中声字は、パスパ文字において試みられたように、前舌母音を表す文字と後舌母音を表す文字の結合によって二重母音を表すという方式で製字されたものであると主張した。

第三は、これまで喩母‘ᠮ’字について議論されてきた内容を批判的に検討したことで、次のような主張を行った。

パスパ文字における喩母‘ᠮ’の音価は [a] または /null, ø/ であり、後者の場合は訓民正音の欲母‘ㅇ’、つまり‘ㅇ’ [i] , ᠠ [a, a] , ᠤ [o, u] , ᠤ [ü, ω] のように、母音字を単独で記す場合に必ず付された記号と見るべきである。また、『蒙古字韻』におけるパスパ文字の喩母‘ᠮ’字や訓民正音における欲母‘ㅇ’は現代の生成音韻論において主張される、音節を形成する [+syllabic] の素性を表示するものである。

⁴⁰ これについては〔解例本〕『訓民正音』の「制字解」に“ᠮ, ᠮ, ᠮ, ᠮ 起於 |, 而兼乎人, 爲再出也。—ᠮ [yo, yu], ᠮ [ya], ᠮ [yü], ᠮ [yü] は | [y] から起り、| (人を象る) を兼ねるので、再出するのである。”とある記述を参照。

参考文献

- 金完鎮・鄭光・張素媛（1997）『國語學史』ソウル：韓國放送大學校出版部。
- 寧忌浮（1994）「『蒙古字韻』與『平水韻』」『語言研究』1994-2: 128-132.
- 李基文・金鎮宇・李相億（2000）『改訂増補版 國語音韻論』ソウル：學研社。
- 鄭光（2008a）「『蒙古字韻』と八思巴文字と訓民正音」『第2次韓國語學會國際學術大會發表要旨』（2008「ハングル」國際學術大會，2008年8月16-17日，高麗大學校仁村紀念館，Session I「ハングルと文字」）：10-26.
- （2008b）「『蒙古字韻』と八思巴文字—訓民正音制定の理解のために—」『第1次世界の中での韓國學研究國際學術討論會豫稿集』（北京中央民族大學韓國學・朝鮮研究中心主催，2008年10月25-26日）：18-42.
- （2008c）「訓民正音字形の獨創性—『蒙古字韻』のパスパ文字との比較を通じて—」『訓民正音とパスパ文字國際學術 Workshop 豫稿集』（International Workshop on Hunmin-jeongeum and hPags-pa script）：50-65. 韓國學中央研究院.
- （2009a）The Vowels of hPags-pa Script and the Middle Sound Letters of Hunmin- Jeongeum, Korean Hangu (論八思巴文字的母音字與訓民正音的中聲) . (*The hP'ag-pa script: Genealogy, Evolution and Influence, The 16th World Congress, The International Union of Anthropological and Ethnological Science, Kunming, China, July 27-31, 2009*). 個人發表要旨
- （2009b）「契丹・女眞文字と朝鮮の口訣字」2009年8月22-23日，札幌市・北海道大學人文・社会科学総合教育研究棟，豫稿集「漢字情報と漢文訓読」，7-20，.
- （2009c）『蒙古字韻 研究』ソウル：博文社。
- （2010）「契丹・女眞文字と朝鮮の口訣字」『日本文化研究』第36輯：210-260. 東アジア日本文化研究会。
- 洪起文（1946）『正音發達史』上・下。ソウル：ソウル新聞社出版局。
- 野間秀樹（2010）『ハングルの誕生—音から文字を創る—』（平凡社新書523）東京：平凡社。
- 服部四郎（1984a）「パクパ字（八思巴字）について—特にeの字とèの字に関して—（一）」(On the hPhags-pa script - Especially Concerning the letters e and è - (I)) 『月刊言語』13(7): 100-104 (服部四郎 1993『服部四郎論文集』：216-223. 東京：三省堂。より引用) .
- （1984b）「パクパ字（八思巴字）について—特にeの字とèの字に関して—（二）」(On the hPhags-pa script - Especially Concerning the letters e and è -(II)) 『月刊言語』13(8): 116-121 (服部四郎 1993『服部四郎論文集』第3巻：224-235. 東京：三省堂。より引用) .
- 吉池孝一（2005）「パスパ文字の字母表」『KOTONOHA』第37號：9-10. 長久手町（愛知）：古代文字資料館。
- 王力（1985）『漢語語音史』北京：社会科学出版社。
- 照那斯圖（2003）『新編元代八思巴字百家姓』北京：文物出版社。
- 照那斯圖（2008）「訓民正音基字與八思巴的關係」『訓民正音とパスパ文字國際學術 Workshop 豫稿集』（International Workshop on Hunmin-Jeongeum and hPags-pa script）：39-44. 韓國學中央

研究院.

照那斯圖・宣德五 (2001a) 「訓民正音和八思巴字的關係探究—正音字母來源揭示—」『民族語文』第3期: 9-26. 中國社會科學院民族研究所.

—— (2001b) 「〈訓民正音〉的借字方法」『民族語文』第3期: 336-343. 中國社會科學院民族研究所.

Ledyard, Gari (1966) *The Korean language reform of 1446—The Origin, Background, and Early History of the Korean Alphabet*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of California. (cf. Ledyard, 1998).

—— (1997) The international linguistic background of the correct sounds for the instruction of the people. In Young-Key Kim-Renaud (ed.), *The Korean alphabet: Its history and structure*, 31-88. Honolulu: University of Hawaii Press.

—— (1998) *The Korean language reform of 1446* (国立国語研究院叢書2). ソウル: 新丘文化社.

—— (2008) The Problem of the "Imitation of the Old Seal": Hunmin Chōng'ŭm and hPagspa. 『訓民正音とパスパ文字国際学術 Workshop 豫稿集』 (International Workshop on Hunmin-Jeongeum and hPags-pa script): 1-25. 韓国学中央研究院.

Poppe, Nicholas (1954) *Grammar of Written Mongolian*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

—— (1955) *Introduction to Mongolian Comparative Studies*. Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura.

—— (1957) *The Mongolian Monuments in hP'ags-pa Script*, second edition, translated and edited by John R. Kruger. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

—— (1965) *Introduction to Altaic Linguistics*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Pozdņev, A. M. (1895-1908) *Lekcii po istorii mongol'skoj literatury*. vol. I-III. St. Petersburg.

Vladimirtsov, Boris Ya. (1932) Монгольские литературные языки. *ZIV* 1: 8.

Vowel Letters in the Hunmin-jeongeum and Phags-pa Scripts

Kwang Chung (鄭光)

kchung@korea.ac.kr

Keywords: Menggu Ziyun, the Phags-pa script, Vowel letters of Hunmin-jong'um, Hangul's [◌], Invention of Hunmin-jong'um, Hangul and Phags-pa, Vowel letters of Phags-pa

Abstract

The Phags-pa script that was devised by Khubilai Khan of the Yuan dynasty had a considerable influence some 170 years later on the making of the Korean script, Hunmin-jong'um. Each of the 36 consonant characters in the traditional Chinese phonology was given a separate shape in the Phags-pa script. A table of these 36 letters was recorded in Menggu Ziyun (蒙古字韻), a Mongolian rhyming dictionary, published in 1308, from which one can tell the phonetic values of the Phags-pa letters. This book, which transcribed standard Chinese of the Yuan period in the new Mongolian script, was hand-copied between 1736 and 1776, during the Qianlong era, in Qing Dynasty Chinese, and the British Library has the only extant copy in the world today.

The vowel letters of the Phags-pa script, however, have not been accurately identified, but in this article, I argue that seven characters appended as “ᠪ ᠸ ᠸ ᠸ ᠸ ᠸ ᠸ ᠸ 此七字歸喻母” to the Table of 36 Initials (三十六字母圖) represented vowels. They are, according to the Fifteen Rhyme Categories (十五韻), [i], [u], [iu, ü], [o], [eo, ø], [ε], and [ɑ], which were the letters for Middle Mongolian's four front vowels [i, ü, ø, ε] and three back vowels [u, o, ɑ]. In Middle Mongolian, there was a vowel harmony of front /ü, ø, ε/ vs. back /u, o, ɑ/, /i/ being the neutral vowel.

There are eleven vowel letters in Hunmin-jong'um, but if one subtracts four digraph (diphthong) letters, there were seven letters for monophthong vowels. I claim that these seven letters are imitations of the Phags-pa vowel letters. As is well known, in Middle Korean also, there was a vowel harmony of back /◌ [o], ◌ [u], ◌ [a] vs. front /◌ [ø], ◌ [ü], ◌ [ä], with /◌ [i] as the neutral vowel. These systematic parallels between Middle Mongolian and Middle Korean appear to be due to the influence from the Phags-pa script.

In addition, [◌, 欲母] of Hunmin-jong'um is a null symbol indicating its [+syllabic] nature just like the Phags-pa's Yumu [喻母, ᠸᠠ], and thus the null character [◌] too can be regarded as having originated from the graphic principles of the Phags-pa script.

(チヨン・クワン 高麗大學)